

日本古典文学大辞典

第四卷



そのの

日本古典文学大辞典

第四卷

岩波書店

日本古典文学大辞典 第四卷

第四回配本(全六卷)

一九八四年七月二〇日 第一刷発行

定価 一三〇〇〇円

編集者 日本古典文学大辞典
編集委員会

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所 饑岩波書店

電話 〇三-五四三二
振替 東京六〇二四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© IWANAMI SHOTEN 1984

Printed in Japan

第四卷

その

そ

る。また『朗詠詩歌』(東大本)もその作とい
う。【作風】救済の『北野社法楽千句』にお
ける発句「木のもとにかさなる霜のふり葉
かな」のように厳しい写生とともに、『文和
千句』の「秋のうきをばのこす故郷／露なら
ば涙の袖に心せよ(素阿)」のような機智・洒
落の秀句も得意としている。(斎藤義光)
【参考文献】金子金治郎『菟玖波集の研究』昭和
40年。

相阿 連歌作者。生没年未詳。応
永八年(四〇二)から康正三年(四三七)の間は存
命。【事蹟】室町幕府の同朋衆として將軍
足利義教に仕えた。応永八年渡明使節の一
員として参加。康正元年ころから同三年ま
で連歌奉行職をつとめた。永享元年(四三
五)妙法院における百韻連歌、同四年室町殿に
て月次連歌、同五年北野社法楽一日一万
句、康正元年飯給州邸における百韻連歌等
に参加。作風は、代表句「空や月松ふり出
す庭の雪」に見られるように、表現の珍し
さやはやかな言い回しに秀れていた(古
今連談集)。(斎藤義光)

素阿 連歌作者。別名素眼。生没
年未詳。【事蹟】周阿とともに救済(せうきう)
に学ぶ(ひとりと)こと。四条金蓮寺の僧で、
書を能くし、相阿・成量などとともに座の
執筆(しつ)もつとめた(梵灯庵主返答書)。文
和四年(三三三)、二条良基第での『文和千句』
に一座した。『菟玖波集』入句者のうち、救
済の二二六句に比し、素阿付句二十二句、
発句二句で、文和から永享(四二四)二期
にかけての代表的作家であった。なお、
『新札往来』の著者で、康暦二年(三三〇)八月
五日(同奥書)までは生存していたと思われ

素意 平安時代の歌人。俗名、藤
原重経。紀伊入道ともいう。藤原氏南家武
智鷹流、越前守懐尹の男。一説に成尹の孫
とも、重尹の孫とも伝える(尊卑分脈)。母
は大中臣輔親の女。系図には世代的混乱が
窺われるが、父系に参議菅根以来の翰林、
母系に大中臣家の歌道の血を引く。従五位
下紀伊守。一宮紀伊(祐子内親王家紀伊)の
夫で紀伊の母一宮小弁とも近い親族に当
る。寛治八年(一〇二二)二月二十九日、往生人
として遷化した(多武峰略記)。享年未詳。
【事蹟】在俗時代、『六条齋院歌合』に出詠
したり、山荘に橋為仲等を招いて歌会を催
したりしたが、康平七年(一〇六四)粉河寺で出
家し、延久三年(一〇七二)多武峰に入って草庵
を結び、経通上人より頭密を承け、造寺造
仏等の作善に務めた。この間、『多武峰往
生院歌合』の判者もしている。良運とも交
渉があった。勅撰集には、『後拾遺集』に七
首、『千載集』に一首入集。『後拾遺集』作者
であることを誇った逸話が残る(袋草紙・
上)。(生園?一〇四) [後藤祥子]

【参考文献】萩谷村『平安朝歌合大成』(三)昭
和34・36年。○斎藤照子「良運とその周辺」
(『共立女子大学短期大学部紀要』昭和36年12
月)。

相阿 連歌作者。四条道場金蓮寺
僧で救済(せうきう)門か。生没年未詳。応永三
十二年(四三三)十二月十一日、伏見宮邸臨時
勝負連歌「何路百韻」に加点看聞御記紙背
文書、この時までは生存か。【事蹟】『菟
玖波集』に入集付句六句。『紫野(むらさきの)千句』
に第四位で発句一・付句七十。第九・何目
百韻の発句「いづともみむ名も常夏の花ざか
り」を詠む。書に巧みで素阿・成量らとともに
多年執筆(しつ)をつとめたという(梵灯庵
返答書)。心敬によって、真下満広(まのした
みひろ)とともに南北朝中期以降の代表的作家とし
てあげられ(ささめごと)、また宗祇によ
り、中古における梵灯庵以下六名の代表的
作家の一人に加えられている。「木がらし
の秋吹のこす紅葉かな」に見られるような
その作風は、「えんにこと葉よろしく覚侍
り」(所々返答)と評される。【付記】梵灯
庵の門人にも四条金蓮寺の僧相阿がいる
が、あるいはこの相阿と師資相承の関係が
あるか。(斎藤義光)
【参考文献】金子金治郎『菟玖波集の研究』昭和
40年。

増阿弥 室町時代の芸能者。生没年
未詳。田楽新座の名手。世阿弥と同時代に
活躍したが、世阿弥が「感涙も流るるばか
り」(冷えに冷えたり)と激賞する名手で、
『田楽談儀』にもその芸についてしばしば言
及する。その芸質を評価した足利義持の後
援もあつく、度々勸進田楽を興行して、田
楽復興の立役者であった。世阿弥芸論の理
論的深化に増阿弥の与えた影響力は大きい
と考えられる。(伊藤正義)

宗安小歌集 一卷。歌謡。別称
「室町時代小歌集」。沙弥宗安編。序奥書
によれば、編者の請いに応じてこれを清書
したのは久我有庵三休、すなわち大納言久
我教通。【編者・成立について】編者宗安
については、(一)谷忍齋の『数奇者名匠集』の
系図から、近世初期の堺の豪商で茶人であ
った銭屋松江宗安とする説(志田延義)。従
って本書は寛永後半(一六四四)から慶安(一六
五〇)にかけて成立。(二)序、所収歌の詞型・用
語・語法などから松江宗安説に反対する説
〈浅野建二「吾郷寅之進」〉。浅野は堺の茶人
渡辺宗安を、吾郷は「鹿苑日録」文禄三年(一
五九二)八月十日条に見える宗安を編者に擬し
て、本書の成立を慶長四年(一五九七)以後数年
の間とする。(三)『言経(ごんけい)卿記』天正十五年
(一五八七)ないし十七年の条に見える茶人宗安
(浅野説と同人)を擬し、従って本書の成立
を慶長八、九年ごろとする(荒木良雄など
諸説あり不詳であるが、その小歌を安土桃
山期のもとする見解においては諸説とも
一致している。【内容】所収歌数二二一
首。ただし二首重複しているので正しくは
二一九首。序文に「古き新しき小歌に節々
をつけて、河竹の世々の遊びとぞなし持
るとあり、『閑吟集』との共在歌三十七首、
『隆達小歌』との共在歌二十四首もあるよう
に、本書は『閑吟集』以来の伝統小歌を継承
しながら、広く諸歌謡と交渉の著しい中世
小歌の補遺編としてすこぶる貴重である。
とくに『閑吟集』と同じく、漢詩句調や和歌
的発想のもの、七七形・七五七五形など二
句・四句の短詩型のものが多いが、また不
定形の口語的律調増加の傾向が著しく、現
行の風流踊歌(ふうりゆううた)の祖歌と思われるも
のも少なくない。なお、本書は昭和六年笹
野堅によって発見・紹介された無題名の巻

子本である。【複製】『室町時代小歌集』(笹野堅、昭和6年。釈文・解題・歌詞索引あり)。
【翻刻】新註国文学叢書「室町時代小歌集(浅野建三)解説・注釈」。新潮日本古典集成。「宗安小歌集」の本文と覚え書き(『東北工業大学紀要』昭和40年3月、大友信一解説)。
【参考文献】志田延義「宗安小歌集の編者、成立期と隆達小歌集の草歌」(『日本歌謡史』昭和33年)。
○浅野建三「宗安小歌集の成立と特質」(『日本歌謡の研究』昭和36年)。
○同「宗安小歌集」(『中世歌謡』昭和39年)。
○荒木良雄「宗安後日考」(『国語と国文学』昭和38年12月)。
○北川忠彦「宗安小歌集私注」(『中世歌謡』昭和41年1・4)。
○吾郷寅之進「宗安小歌集」(『中世歌謡の研究』昭和46年)。

【参考文献】山口光田「新出『草案集』と安居院流学派」(『仏教文化研究』昭和30年11月)。
【参考文献】水井義憲「草庵集」(『和歌』十巻・統集五巻)。

【参考文献】山口光田「新出『草案集』と安居院流学派」(『仏教文化研究』昭和30年11月)。

【参考文献】水井義憲「草庵集」(『和歌』十巻・統集五巻)。

【参考文献】水井義憲「草庵集」(『和歌』十巻・統集五巻)。

に講ぜられる経釈談義で、第八巻は法華八講の最終日のもの。この経釈に際して来意・釈題・入文解釈に続いて比喩因縁談として説話を引用しており、特に第八巻では観音の化現を述べ、片仮名を多く混え、文学的表現に富んでいて、唱導談義における説話の引用を具体的に示すものとして貴重である。三身釈は仏の三身(法、報、応)が一仏の三用であることを説いているが、その第三の末尾に澄憲の名が見え、この書が安居院流に密接なる関係をもつ唱導文集であることを語っている。【複製】貴重古典籍刊行会叢書2期。

【参考文献】山口光田「新出『草案集』と安居院流学派」(『仏教文化研究』昭和30年11月)。

【参考文献】水井義憲「草庵集」(『和歌』十巻・統集五巻)。

【参考文献】水井義憲「草庵集」(『和歌』十巻・統集五巻)。

後の作に、正集に所収されるべき時期の歌をかなり加え、貞治四、五年ごろの作にまで及んでいる。【影響】頼阿在世当時から称讃されたことが伝えられているが、頼阿の子孫が歌道宗匠として二条家の道統を承け継いで行ったこともあり、『草庵集』『統草庵集』は二条家の正風として尊重された。『落書露頭』や『東野州聞書』には人々の『草庵集』の風体への追隨を批判する言辭も見出される。江戸時代に入っても高く評価され、『詞林拾葉』などで絶讃されている。また、真松固禪『草庵集啓蒙』六巻、本居宣長『草庵集玉箒』九巻統三巻、桜井元成『草庵集難註』二巻、芝山持豊『草庵和歌集聞書』十五巻、香川宣阿『草庵和歌集蒙求詳解』十五巻統五巻などの注解が著されている。【諸本】正集は三類九系統に分かれ、統集は諸本間の異同は少ないが三類十五系統になる。【翻刻】校註国歌大系14。私家集大成・中世Ⅲ。【付記】頼阿法師詠一卷は延文二年に自撰されたもの。春・夏・秋・冬・恋・雑に部類されており、歌数三七〇首余であるが、六首を除き『草庵集』『統草庵集』と重複している。『新千載和歌集』の勅撰にあたって、自撰して撰集したものと認められている。未刊国文学資料「頼阿法師詠と研究」所収。(藤平春男)

【参考文献】石田吉貞「頼阿・慶雲」(昭和18年)。
○井上宗雄「中世歌壇史の研究」(南北朝期、昭和40年)。

【参考文献】石田吉貞「頼阿・慶雲」(昭和18年)。

【参考文献】石田吉貞「頼阿・慶雲」(昭和18年)。

に二句入集。文明十七年(西曆十一月二十八日没、六十八歳)大乗院寺社雑事記)。
【閏歴】将軍足利義政の近習をつとめ、義政や義尚の連歌、和歌の会に常に出席し、和漢の文才を發揮した。また小笠原流弓馬の達人で、一休宗純に参禅した。連歌は宝徳三年(西曆)の『三代集作者百韻』以呂波百韻に中堅作家として賢盛の名を見るが、翌四年「宝徳千句」には第三の発句をよんでいる。文明三年能阿没後、連歌宗匠となり、同八年義政参内の供をして得意の早歌(か)を歌い、天皇発句に脇を助めた。また同十一年義政勸進の「崇徳院法楽百首」に出詠、翌十二年秋頃出家して伊賀入道宗伊と称した。親長卿記が、同十六年義尚撰集の『和歌打聞集』には武家からただ一人の撰衆に命ぜられるなど、歌人としても活躍した。しかし前妻・俊妻を相次いで失い、また義政の不興を蒙るなど、晩年は不遇のうちに没した。【作風】『竹林抄』に付句二〇九、発句二十五八、校本竹林集。『新撰菟玖波集』には付句三十八、発句八で、七賢中第五位であるが、宗祇は『老のすさみ』に和漢の故事で付けた句「手を合はするは裏か表か/左みぎ分くる小鳥のあらしひに」ほか三句を挙げ、その才覚と共に場面構成に雅趣を添える巧みさを賞賛し、また叙景句についても「まことに所がらのさま見るやうにて」と評している。発句では、杜甫などの詩境を思わせる「花落ちて鳥なく春の別かな」がおくのはそ道「出立別離の句に影響しているようである。【著作】文明十四年二月五日湯山で宗祇との両吟「何路百韻(湯山)両吟」は代表作。またその際、宗祇と共編した『連歌嫌様事』があり、句集には『諸家月次連歌抄』がある。

【参考文献】石田吉貞「頼阿・慶雲」(昭和18年)。
○井上宗雄「中世歌壇史の研究」(南北朝期、昭和40年)。

【参考文献】石田吉貞「頼阿・慶雲」(昭和18年)。

【参考文献】石田吉貞「頼阿・慶雲」(昭和18年)。

畠山政長・宗祇との三吟に『畠山左金吾四季
題万句三物』がある。〔国〕二四八・四五

〔浜千代清〕

【参考文献】伊地知鉄男『宗祇』昭和18年。○井
上宗雄『中世歌壇史の研究』室町前期、昭和36
年。○木藤才蔵『連歌史論考』上、昭和46年。
○島津忠夫『宗祇と宗伊』、『連歌俳諧研究』昭
和54年1月。

宗 因むね 連歌作者。俳人。西山氏、

通称次郎作、諱豊一(註)。連歌名初め豊
一、後に宗因。俳名一幽、後に西翁・西山
翁また梅翁・野梅子・野梅翁。連歌師宗因が
有名となつて、世間ではすべて宗因と記す
ことが多いが、宗因自身は区別して用いて
いたようである。別号長松軒・忘吾齋・向栄
庵。天和二年(一六六二)三月二十八日没、七十
八歳。大阪天満西寺町西福寺に葬る。法名
実省院田齋宗因居士。一説に江戸客死説あ
つて谷中日暮里養福寺に墓ありというが、
疑わしい。

【閏歴】すべて宗因名のもとに、その生涯
を大分して前後の二期、さらに細分して四
期に分かつて記す。

『前期』第一期(慶長十年(一六〇五)―寛永九年
(一六三三))。加藤清正の家来西山次郎左衛門
の子として熊本に生れた。祖父は結城秀康
に仕え後に大坂夏の陣に加わつて戦死した
御宿勤兵衛正友と伝えるが不明。八歳の頃
より城北岩立口の釈将寺の豪信僧都につい
て和歌の手ほどきを受け、元和五年(一六三〇)
十五歳の頃より家老八代城代の加藤正方
(風庵)の小姓として側近に奉仕、やがて正
方の感化影響によって連歌の道に志す。元
和七年より寛永六年に至る八年間、京都の
加藤家伏見屋敷詰めを命ぜられ、里村家の

学寮に出入して昌琢を師として連歌ならび
に歌学を学ぶ機会に恵まれる。これ全く主
君正方の恩寵によるもので、主従の契りは
連歌を媒として終生渝らぬものとなる。元
和七年十月二十四日、佐河田昌俊興行の連
歌百韻に豊一の名が見えるのが、その最も
早い記録である。但し、『宗因発句帳』に初
めて上洛の年を元和九年十九歳とするの
は、誤りであろう。この在京中に宗因は、
師の昌琢に随従して諸方の連歌会に出座し
て、多くの知己を得た。中でも学寮の近く
に住んでいた松江重頼との出会いは、後年
宗因が俳諧に携わる大きな機縁となる。そ
して帰国の直前には、昌琢より『伊勢物語』
の講釈の伝授を受け、寛永六年九月十日、
江戸参府の掃途伏見に立寄つた正方の供を
して帰国することになる。その前日、正方
が玄仲・玄陳・玄的等の連歌師や町人岡本言
当等を招いて『賦何白連歌』百韻を興行して
いるのは、宗因在京中世話になつたことを
感謝するためであつたらう。ここにも正方
の並々ならぬ配慮が看取される。帰国後再
び正方の側近に奉仕することになつた宗因
は、寛永七年十二月、藩公忠広の嫡子光正
の将軍初見ならびに叙爵祝儀のため参府の
正方に扈從して江戸に下り、翌八年三月二
十五日より晦日までの五日間、正方の相手
をして『花千句』を両吟している(『両吟千
句』)。その第一「何人」百韻は、「春に花枝
をつらねし盟かな(正方)／いく世なれぬる
庭のうぐひす(宗因)」の発句・脇に始まる
が、これが宗因号使用の最初であり、また
彼の初期連歌の代表的作品でもある。然る
に翌九年六月突発した光正の陰謀廻文事件
によって、忠広・光正は流罪、肥後一國は
収公となり、同七月二十二日熊本・八代兩

城を明け渡して家中離散の悲運に際し、
宗因は正方と共に浪人となる。

第二期(寛永十年―正保四年(一六五七))。こ
の期間は宗因の浪人時代、そして連歌師と
して独立の第一歩を踏み出した時期であ
る。開城後間もなく、上京する旧主正方を
京都まで送つた宗因は、すぐに引返して熊
本に帰る。約一年間、その間に今後につ
いていろいろ苦慮したことであろうが、つ
いに意を決して、寛永十年九月二十五日熊
本を去つて十月十五日京都に入る。その時
の紀行が、宗因紀行文学の最初の傑作『肥
後道記』である。京都最初の住居は、六条
本圀寺塔頭了覚院の正人道人風庵の隠栖に
程近い、五条あたりの小家であつた。そし
て再び昌琢の推輓によって堂上方の連歌会
に召加えられ、柳管連歌始め奉仕のため参
府の昌琢に従つて東下し、大名・高家の連
歌会にも伴われるようになる。昌琢没後
は、その弟昌俣及び里村北家の玄仲・玄的
の引立てを得て、西本願寺門跡や近衛御所
また伏見奉行小堀政一(寛永十六年四月)張行に
奉仕したり、政一の所望によって独吟一日
四百韻(寛永十九年九月)を献じたりしてい
る。居を伏見に移したのも政一との繋がり
からか、同じ年に伏見において一子宗春を
儲けている。とはいへ、渝らぬは旧主正方
との「盟」であつた。連歌師として独立後
も、しばしば正方興行の一座に加わり、正
方に従つて諸家の会席に出ている。寛永十
五年春、北野宮法案に正方の発句を得て
『十花千句』を独吟したもの、全く正方の再
び世に用いられんことを祈願してのことであ
つた。また寛永十七年春、正方東下に供

して江戸留滞半歳に及んだのも、旧主の仕
官運動のためであつた。然るにその運動が
かえつて幕府の忌諱に触れて、正方は広島
藩御預けとなり、正保元年九月宗因に見送
られて広島に下り、慶安元年(一六五〇)ついに
同地に客死するのである(正方一周忌追善
の独吟千句『宗因連歌千句』がある)。宗因
が里村家の推挙によって、摂津南中島天満
宮の連歌所宗匠として大阪に下る決心をし
たのは、一つにはこの正方広島御預けが動
機であつたと考えられる。

【後期】第一期(正保四年―寛文十一年(一六
七〇))。連歌所宗匠としての宗因の任務は、
慶長十九年以来中絶していた月次連歌を再
興(慶安二年(一六五九)正月)することであり、
続いて慶安五年二月には、菅家神退七百五
十年を記念して、崇敬者の堂上・武家・門跡
を初め地下有力者を網羅した万句を興行し
ている。そして近郷の平野惣社・堺天神佐
太宮・明石人丸社等の月次連歌にも招請さ
れて声望年を逐うて高く、明暦二年(一六五
六)九月には大阪住居十年を機として境内の長
屋を出て、天満盤屋町に向栄庵(一名有
芳庵)を営んで移居した。その時宗因は告
天満宮文(一名有芳庵記)を草して、神
明の加護を謝している。この頃より宗因の
名声諸國に弘まり、奥州平の内藤義泰(俳
号風虎)、九州小倉の小笠原忠貞、明石の
松平信之、姫路の榊原忠次、大阪城代の青
山宗俊等諸侯の尊崇を受けて各地を歩いて
いる。『松島一見記』(寛文二―三年)、『筑
紫太宰府記』(同三年)、『西国道日記』(同五
年)等の紀行は、これらの旅における数多
い連歌作品以外の副産物である。またこの
期で注目すべきことは、大阪居住の初め京
の重頼を招いて俳諧百韻を興行しているこ

の並々ならぬ配慮が看取される。帰国後再
び正方の側近に奉仕することになつた宗因
は、寛永七年十二月、藩公忠広の嫡子光正
の将軍初見ならびに叙爵祝儀のため参府の
正方に扈從して江戸に下り、翌八年三月二
十五日より晦日までの五日間、正方の相手
をして『花千句』を両吟している(『両吟千
句』)。その第一「何人」百韻は、「春に花枝
をつらねし盟かな(正方)／いく世なれぬる
庭のうぐひす(宗因)」の発句・脇に始まる
が、これが宗因号使用の最初であり、また
彼の初期連歌の代表的作品でもある。然る
に翌九年六月突発した光正の陰謀廻文事件
によって、忠広・光正は流罪、肥後一國は
収公となり、同七月二十二日熊本・八代兩

の並々ならぬ配慮が看取される。帰国後再
び正方の側近に奉仕することになつた宗因
は、寛永七年十二月、藩公忠広の嫡子光正
の将軍初見ならびに叙爵祝儀のため参府の
正方に扈從して江戸に下り、翌八年三月二
十五日より晦日までの五日間、正方の相手
をして『花千句』を両吟している(『両吟千
句』)。その第一「何人」百韻は、「春に花枝
をつらねし盟かな(正方)／いく世なれぬる
庭のうぐひす(宗因)」の発句・脇に始まる
が、これが宗因号使用の最初であり、また
彼の初期連歌の代表的作品でもある。然る
に翌九年六月突発した光正の陰謀廻文事件
によって、忠広・光正は流罪、肥後一國は
収公となり、同七月二十二日熊本・八代兩

の並々ならぬ配慮が看取される。帰国後再
び正方の側近に奉仕することになつた宗因
は、寛永七年十二月、藩公忠広の嫡子光正
の将軍初見ならびに叙爵祝儀のため参府の
正方に扈從して江戸に下り、翌八年三月二
十五日より晦日までの五日間、正方の相手
をして『花千句』を両吟している(『両吟千
句』)。その第一「何人」百韻は、「春に花枝
をつらねし盟かな(正方)／いく世なれぬる
庭のうぐひす(宗因)」の発句・脇に始まる
が、これが宗因号使用の最初であり、また
彼の初期連歌の代表的作品でもある。然る
に翌九年六月突発した光正の陰謀廻文事件
によって、忠広・光正は流罪、肥後一國は
収公となり、同七月二十二日熊本・八代兩

とである。連衆には後年の宗因門の長老玖也・保友等の名も見えるが、これを最初として宗因は、以後重頼と結んで俳諧においても目覚ましい活躍をする。重頼の『懐子』『佐夜中山集』は勿論、立圃の『小町踊』等当時の撰集には必ずといってよい程入集し、梅盛の『俳仙三十六人』には早くも俳仙の一人に加えられている。そして向栄庵に俳諧の月次会を主催し、点料を取って諸方の点取にも応じている。しかし世間的にはともかく、宗因の身边には不幸が相次いだ。旧主風庵に続く父次郎左衛門の死は仕方がないとしても、引続いて孫女そして二女・一男に先立たれ、寛文七年十月には外護者の小笠原忠真と妻を相前後して喪つてゐる。宗因時に六十三歳、今さら人生無常に驚くはずもないが、実際には寛文九年四月小笠原忠雄の家督祝儀に小倉に下つた機会に、翌十年二月十五日、忠真の菩提寺福聚寺の法雲禪師について受戒出家し、同時に天満宮連歌所宗匠の職も宗春に譲つて、今は身も心も軽く故郷その外九州各地を巡遊して、同十一年十月に漸く帰阪するのである。巡遊中に巻いた独吟百韻一卷は『釈教俳諧』として刊行されている。

第二期(寛文十二年—天和二年)。第一期において早くも宗因は、貞門古風の言語遊戯的『詞付(詞付)』から脱却して、軽妙自由な聯想による『心付』に特色を發揮し、清新の風を俳壇に吹き込んだ。それは守武の余風を慕い、敢えて俳諧は和歌の寓言(寓言)連歌の狂言なることを肯定し、みずから軽口・狂句を以て標榜するものであつて、この守武流もしくは西翁流とも称せられる新風が、第二期に入るや俄然全国を風靡するに至る。詳しい事は俳諧史に譲るが、新鋭

の鶴水(西鶴)がいち早く門下に馳せ参じて『生玉万句』に名乗を挙げたのは、寛文十三年(延宝元年)春。越えて延宝三年(六五)四月、宗因東下して内藤風虎の屋敷に滞在した時には、雪柴・在色・松意ら宗因に巻頭発句を請うて十百韻を興行し、『談林十百韻』、またこの時芭蕉・素堂等もまた、宗因を迎えて百韻を興行している。同じ頃、著作を通じて宗因流を宣揚していた岡山の惟中が、延宝六年五月上阪して賑かになる。京の高政もまた相前後して宗因に傾倒し、同六年夏には宗因から「末茂れ守武流の惣本寺」と挨拶の句を得て大いに張切る。勿論こうした宗因流の擡頭活躍には、貞門古風とても黙視してはられない。早くも南都の去法師が『澁因(澁因)』(延宝二年三月序)を出して宗因の『蚊柱百句』を打てば、惟中これに対して『澁因返答』を以て応ずるといふ風に、双方の対立拮抗表面化し、ついに高政の『俳諧中庸姿(俳諧)』(延宝七年九月刊)に端を発する激しい論戦にまで発展する。その間に処して宗因はどうであつたかといへば、「古風当風中昔、上手は上手下手は下手、いづれを是と弁へず、すいた事してあそぶにはしかじ。夢幻の戲言也」(阿蘭陀丸二番船)と記しているように、超然悟りすましていたようであるが、対貞門の論争が一転して、宗因の跡目をめぐる同門内の反目・非難となるに及んでは、ほとほと愛想が尽きたらしい。延宝七年五月伊勢松坂に遊び、さらに内宮長官荒木田氏富・外宮長官渡会満彦に招かれて八月まで滞留、その間珍しく毎月のように連歌を興行、また『源氏物語』の講釈をして帰阪しているが、晩年「なんにもはや楊梅(楊梅)の実(実)むかし口」(阿蘭陀丸二番船)の一句に俳

諧の「口を閉ちて世を連歌に終」つたという「梅翁宗因発句集」の所説は首肯し難い。しかし「俳歳旦は不仕、当風あはぬ事、無用ニ存候」(延宝九年正月十九日付)と氏富に申し送つているところを見ると、やはり俳壇の現状には嫌なぬものがあつたらしく、天和元年十一月には梅朝を伴つて洛西鳴滝の辺に山居し、世の煩わしさを避けてゐる。それから間もなく翌二年三月十九日に発病、十日ばかりの煩いの後に卒した。最後の場所は確定するに至らぬが、少なくとも天満の隠居所ではなかつたようである。(註二六五—二六六) [野間光辰]

【参考文献】 頼原退蔵『西山宗因』(西山宗因の連歌(頼原退蔵著作集5、昭和55年)。○野間光辰『宗因と正方』(連歌師宗因(国語国文)昭和27年8・10月、昭和28年9月)。○同『西山宗因(俳句講座)3、昭和33年、明治書院』。

宗因飛鳥川(飛鳥川) 一冊。紀行。宗因作。寛永十年(二六三)頃成立か。【内容】寛永九年六月、肥後の加藤家改易によつて浪々の身となつた宗因は、主君の加藤正方の伴をして京から武蔵国へと流浪の旅を続ける。その後京に戻り、正方はここに居を定める。京で正方と別れた宗因は、年老いた母や知友を訪ねて故国肥後に下り、しばらく滞在した後再び彼らと別れて上京する。この間のことを綴つたのが本書である。文章はなだらかな和文体で、その間に和歌・狂歌・発句を交えて一編の文学作品をなしている。題材は旅中目に触れた光景や、ふと出会つた人物についての印象を主とするが、宗因の母や知人のことなども記されており、彼の伝記資料としても貴重である。原題は不明だが、冒頭の「飛鳥川の

淵瀬常ならぬ世は今更おどろくべきにしもあらねど」という文句により、後人が「飛鳥川」と命名した。作者についても、末尾に「たれか又哀とも見む書とむる筆のあとさへうらめしの身や(幽林野子(花押))」とあるのみだが、内容や筆蹟によつて宗因の作品と定められている。【伝本】 原本は高知県高岡郡佐川町の青山文庫所蔵で宗因自筆とされている。箱書に「伯爵田中光頭大人惠贈、池辺義象」とあり、巻末に「藤園大人に此の書をおくると」と詞書があつて「何人のかきし書かはしらぬひのつくしのゆかりあれはまゐらす」という光頭(青山と号す)の歌が記されている。【複製】 コロタイプ小型本(小宮豊隆監修、昭和8年)。【翻刻】 『近世国文学之研究(弥富破摩雄、昭和8年)』(倭文(丸)の緒環)の仮題で翻刻。同書の「加藤正方と西山宗因」に解説があつた。(田中善信)

【参考文献】 小宮豊隆『宗因の「飛鳥川」に就いて』(芭蕉の研究(昭和8年))。

棕隠軒集(棕隠軒集) 四集八冊。漢詩。中島棕隠作。正しくは「棕隠軒初集(一四集)」。各集とも大本上下二冊ずつ。初集に文政七年(二六四)十二月の自序あり、同八年正月刊。二集は文政十一年正月刊。三集は奥付に文政十三年正月刊とあつて、四集・五集の嗣出を予告し、版元に京都千本通一条下ル堺屋伊兵衛の名を出す。編者は、初集は肥後の門人渋谷隆吉、二集・三集は棕隠の男元丈茂逸、四集は積祖琳英菴(上)、備後津川鼎万鈞(下)、大阪米屋金右衛門版とあつて表紙見返しに「陽氏蔵板」とあるが、刊年を記さない。しかし天保九年(二二六)以前の刊行であることは、同年刊の『平

安人物誌』の記載によって明らかである。この四集二冊は、後に改題後摺して『金帯集』(天保十年刊)六冊の巻一・巻二に加えられた。【内容】棕隠十五歳の寛政五年(一七三三)の作「旗亭春雨」七言絶句四首、十六歳の作「醴歌」七言古詩長編以下、文政九年(一八二六)四十八歳に至る三十四年間の古今体詩一二九六首を収める。排列は、初集・二集のみ時に時代前後し重複しているが、他はほぼ作詩の年代順になっている。これによって少年花月に泥んで江戸に流寓すること十年、帰京後は「鴨東竹枝」の作によって大いに詩名を發したが、自ら世に背いて無用の好事儒者を以て任じ、生活の資を得るために毎年のように紀州・中国・四国・美濃・伊賀・飛騨・北陸・九州に吟遊した棕隠の足跡をたどることができる。その間、菊池五山・頼山陽・篠崎小竹・菅茶山・菊池溪琴・摩島松南・仁科白谷その他の諸家と応酬した作は勿論、各地の風物を詠じた作が多く見られるが、時に「放言」と題して自己の感懐を披瀝し、世相を慷慨するあたりは、単なる風流隠逸の士ならぬ棕隠の真面目を窺わせる。棕隠の詩は宋の袁枚の影響を受けて心情を重んじ、典故ある詩語を駆使しながら平易率直に詠出しているところに特色がある。〔野間光辰〕

こ木も紅葉しにけり唐がらし、(5)「しれさんしよからき名もよし花の縁をそれぞれ発句とする宗因の独吟百韻五巻から成る。(1)は延宝元年夏成立、『蚊柱百句』(延宝二年刊)と題し、(2)は寛文十年(一七六五)十二月成立、『釈教俳諧』(延宝二年刊)と題して、それぞれ単独に出版されている。(3)は延宝元年冬成立。延宝二年春揮毫と推定される自筆本の写しがあり、また延宝三年刊『俳諧絵合』にも収録される。(4)は寛文九、十年頃成立、『唐辛子百韻』と題して出版されたらしい(『俳諧渡奉公など』)。(5)は万治三年(一七二〇)以前の成立。自筆卷子本『賦何桜連譚』が伝わる。(3)(5)もおそらく単行本が存在したとおもわれ、本書はそれら既刊書の人気に便乗した書肆が独断で編集・出版したものであると推定される。(1)を『新統独吟集』(延宝三年刊)により、(2)を別版によつた後刷本が伝わるのをみても、その盛行のさまがしのばれる。なお、本書の続編として『宗因後五百韻』(刊年、編者未詳)が刊行されており、(5)が巻頭に再録されている。【複製】近世文学資料類従・古俳諧編28(加藤定彦解説)。〔乾 裕幸〕

の勢州足代弘氏との両吟百韻、(5)梅翁の「暑氣を去一服や先うす茶碗」発句の禾刀・如見尾蠅・幾音・宗恭・松白・定祐・保俊・素玄との十一吟「秋何百韻」、(6)元順の「月の外は乗合禁制川瀬舟」発句の春澄・梅翁との三吟歌仙、(7)梅翁の「うしやまつる玉の枝にもあら筵」発句の保俊・以仙・素玄・如見・尾蠅・定祐・旨如(旨恕・保友との九吟「致也追善」百韻、(8)梅翁判、素玄・定祐・保俊三吟百韻から成る。各作品の成立年時は、(1)(2)延宝三年夏、(3)寛文三年—延宝元年、(4)延宝四年十一月、(5)同五年五月二十五日、(6)未詳、(7)延宝四年七月八日、(8)延宝二・五年。こうした作年次のばらつきと、内容・形式の不統一から、本書もまた『宗因連歌千句』、『宗因五百句』などと同じく、宗因の名声に便乗した書肆(版下の筆蹟から寺田重徳か)が、書名に「宗因」の名を冠して編集出版したものと推定される。【複製】近世文学資料類従・古俳諧編28(加藤定彦解説)。【翻刻】近世文学未刊本叢書・談林俳諧篇。古典俳文学大系・談林俳諧集(一)。〔乾 裕幸〕

正方が広島島の寓居に病死した。その一周忌追善に手向けた宗因の独吟千句がこれである。大阪天満宮御文庫に「風庵懷旧千句」と題された宗因自筆本が現存するが、その冒頭には長文の前書があり、「志学十五歳」の比喩より、ことに情をかけてめぐみたくて給ひし心ざしの程忘れ難く、風庵辞世の連歌発句ならびに和歌の文字を句の頭にすえて独吟一巻を綴り、やがて千句に及んだので、これを仏に供えんと記している。風庵に対する宗因の心情がよく表わされており、かつ宗因の少年期の伝記的一面が知られるのも貴重である。ただし、版本ではこの前書が削除されていて、宗因の本来の創作意図が不明確になってしまっている。巻頭第一の発句は「終に行月日は今日や去年の秋」。自筆本には、風庵に殉死した青木兵三郎宗忠追善の独吟百韻を巻末に添えているが、これも版本では削除している。要するに版本は、宗因の文名が高まった時流に乗って三十年前の旧作を公刊したままでのものであり、必ずしも宗因の意志を反映したものではなかったようである。【諸本】自筆本のほか写本として天理図書館縮屋文庫蔵本などがある。〔檀上正孝〕

宗因五百句

一冊。俳諧。宗因著。刊記を欠くが、所収作品がすべて延宝二年(一六五二)以前の作であり、『俳諧渡奉公』、阿誰軒の『俳諧書籍目録』に延宝四年正月刊とするのに従うべきであろう。【内容】(1)「蚊柱は大鋸屑(きりぎりすさそふ夕哉)」、(2)「おどろけや念仏衆生節季候(ねんぶつしやうじやうせいきう)」、(3)「さうらたふ五盃機嫌や伊勢神楽」、(4)「摺

宗因七百韻

一冊。俳諧。宗因著。刊記を欠くが、所収作品の一つに「延宝五年五月二十五日」と日付が記され、また若海の「故人俳書目録」に延宝五年(一六五五)とあることなどから、同年の刊行と推定される。【内容】(1)梅翁(宗因)の「よれくまん両馬があひに磯清水」発句の似春・幽山との於鎌倉三吟百韻、(2)同じ連來による三つ物二・発句十三、(3)西翁(宗因)の「口まねや老の驚ひとり言発句の独吟百韻」、(4)宗因の「葉茶壺ありともしらで」行風「発句

宗因連歌千句

二冊。連歌。宗因独吟。版本の内題には「西山宗因当流連哥千句」とあり、写本では「風庵懷旧千句」「風庵追善千句」「宗因独吟千句」等の書名で伝わる。慶安二年(一六五〇)成立。延宝七年(一六五七)京都永田長兵衛・山本八左衛門刊。【成立・内容】本書が版本として流布したのは、宗因の晩年であるが、作品の成立時期は三十年もさかのぼる。すなわち、慶安元年九月二十三日、宗因の旧主風庵こと加藤

早雲寺殿廿一箇条

教訓。関東の戦国大名北条氏の祖、伊勢長氏早雲(宗瑞)の作成と伝えるが、確証はない。【北条早雲廿一箇条】と称呼もあるが、原題は不明。子孫よりも家臣への教訓としての性格が強く、家臣の日常生活と主君への奉公の心得が、平明・簡潔かつ具体的に和文で説かれている。【翻刻】中世法制史料

集3。日本思想大系『中世政治社会思想』上。〔勝俣鎮夫〕

造営記 社寺の造営についての記録。寺院の律令制下での造営の様相は、造東大寺司の残した石山寺造営に關わる文書(大日本古文書所収)に具体的に示されている。律令制解体の十世紀以降では、国内の一宮以下の官社の造営管理にあたっていたことは、「上野国交替実録帳」(九条家本延喜式裏文書、『平安遺文』所収)により明らかである。中世では、東大寺再建にあたった俊乘房重源の例にみられるように、勸進聖が造営の中心となった。下総一宮の香取社の建久年間以来の造営記録(千葉県史料・中世篇所収)には、本殿以下の殿舎については、建物の規模、作料、作料を負担する郷・庄名と地頭の氏名が、また神宝の種類・規模、造営の用途料などが記されており、信濃国一宮の諏訪社の「大宮御造営之目録」(上諏訪造宮帳(新編信濃史料叢書2所収)など)もほぼ同様である。造営記の内容は、社会経済的なもの、他、儀礼面においても注目すべき点が含まれていることもある。〔西垣晴次〕

総援借語 三輯十五卷十五冊。読本。初輯五卷五冊は二世瀬川如皐作、漢齋英泉画。葛飾北齋叙、狂言堂(如皐)の付言が備わる。角書「相馬將門」。文政六年(一八三三)江戸葛屋重三郎・越前屋長次郎・西村与八ら刊。二輯五卷五冊は瀬川如皐作、実は馱亭駒人の代作)、漢齋英泉画。散木居士(竹葉散人)の序文あり。角書「天慶異説」。文政十年江戸西村与八ら刊。三輯五卷五冊は白頭子柳魚(馱亭駒人)作、岳亭丘山画。

丘山序、自跋あり。角書「將門外伝」。文政十二年江戸丁子屋平兵衛ら刊。【梗概】平良将没後、良将の兄常陸大塚国香は粗暴で魯鈍な良将の長男小次郎將門と母玉苗を幽閉せんとするが、玉苗は国香の手を逃れ、自ら小次郎の身を祈願して神靈に身を捧げる。玉苗の祈願が届き邪気が晴れて賢明勇力の士となった小次郎は、国香の討手を追い払い、上洛して瀧口の侍所に召し置かれ瀧口小次郎將門と名乗る(初輯)。侍所を辞し下総国に下向する折、將門は妙見社で影武者七人衆を得てお家再興がかなうとする妙見大菩薩の靈夢を見て、所の代官と争う守谷太郎貫道を救い、七人衆の一人とする。また伊予松山で平純友と値遇の縁を得た將門は、そこで伊賀寿次郎を臣下に加え、奥州多賀里では宮城丈之助輝影と邂逅してここに勇士三人を得る(二輯)。奥州大住の里で浅香五郎次相門とめぐり会い、続いて山野井戸五郎將光、房谷梅童丸清友、深雪之助越国を加えた七勇士と將門は四明嶽に会合し、仇敵国香を討つて相馬の国を平定する(三輯)。【作風】初輯の付言には俗談異説を潤色して將門一代記を編むとある。しかし二輯以後、構想は「水滸伝」に擬した將門と七勇士の因果譚へと転換される。この構想転換の背景には、出版書肆が既にある初輯を生かすべく嗣作を如皐の代作者駒人に頼って成立したという事情があった。従って二輯以後は、各勇士の登場に読者の興味を繋ぎとめようとする低調な作柄に随している。【翻刻】絵本神史小説5(本文のみで序跋文・口絵等を欠く)。〔棚橋正博〕

【参考文献】神保五弥『春色梅児誉美』まで(『為水春水の研究』昭和39年)。

宋屋 俳人。望月氏。長く富鈴(はる)の号を用いたが、延享四年(一七五七)還曆に際し宗屋または宋屋と改号したらしく、やがてもっぱら宋屋を称した。別号百葉泉・机墨庵・富鈴房。明和三年(一七六六)三月十二日没、七十九歳。法名机墨庵春翁宋屋居士。京都一条の浄土宗淨福寺に葬る。【事蹟】京の人。住所は洛北戴恩謝付録・上立売(梅鏡)。享保十二年(一七三三)江戸の早野巴人(宋阿)が入洛滞在、その頃入門したと思われる。『誹諧家譜』に加藤原松門とし、同拾遺で巴人門に訂正するが、前歴不詳。巴人門にあって頭角をあらわし、享保十七年千句興行の高点句集『卯花千句』を郭里(は)と共編。享保十九年北野三千句を吟じて点者となり、巴人が北野聖廟を崇信して『一夜松』を編んだのにならぬ、巴人に序を乞い、記念集『梅鏡』を編み、完成出版したのは元文四年(一七五五)春で、一千部配布したという。ここに巴人後継者としての地位が確立した。旅を好み、この年小春の頃八百彦・象友と共に旅立ち、摂播地方を巡歴、二人に別れてさらに讃岐に渡り、各地を遊杖して帰洛した。この紀行集が『小春笠』である。寛保二年(一七六二)巴人死去の報が宰鳥(は)・蕪村・雁宕(は)によってもたらされると、追善の諸行事を滞りなく行い、翌寛保三年追善集『西の奥』を霊前に捧げた。延享二年(一七五五)春、仙台の旧山と共に吉野の花を賞し、これを記念して「やまとがさ」を編み、旧山の名で出版された。この年の九月さらに芭蕉の跡を慕って奥羽への旅に出発し、翌年冬漸く帰洛するという大旅行を敢行した。その間各地に滞在し多くの門人をえた。この紀行に還曆の賀集を加えたのが宝暦五年(一七五五)跋の『杖の土』である。宝

暦四年先師十三回忌には追善集『明(は)の蓮』を、同八年十七回忌には追善集『戴恩謝(は)』を捧げて誠を尽している。この宝暦八年は古稀に当たり、賀集に高判句を加えて「机ずみ」刊、同じ賀集としての『老木の芽』は翌九年に刊行された。明和三年(一七六六)「西へ行彼岸さくらや道案内」を吟じて死去した。門人武然が終焉記を巻頭に追善集『香世界』を明和五年に手向けた。翌六年嘯山・賈友共編で遺句集『瓢箪集初編』を上梓、巻頭に蕪村面の宋屋像がある。これに嘯山の題する「財ヲ貪レドモ貯エナク、色を好メドモ着セズ、身世ハ一瓢、豈哀樂ニ住セン」(漢文)は、よくその人となりやを伝えるものであろう。宋屋は性真率洒落、巴人門の中心として同門の親和をはかり、一派の発展に寄与するところが大きく、蕉門の伝統を守った。俳風は既して率直、素直に自然を見、対象に接し、大らかさをもっともよく継承していると思われる。句達者で生涯の句々数万と伝える『香世界』、瓢箪集初編が、あまり伝存しない。【門人】鈴山・了派(初号鉄鑊)・宗専(初号松江)・白嶺(初号鈴賀)・嘯山・武然・賈友・文誰・嵐笠・蝶夢らがあり、武然が俳流を嗣いだ。〔大磯義雄〕

早歌 鎌倉中末期に東国文化圏で成立し、中世末期まで二百年余の間、武士を中心に歌われた長編の歌謡。【名称】早歌・現ル也娑婆説・理里有楽(は)の三名をもつ撰謡一体三名秘訣。早歌は催馬楽などに比べテンポが早いための名といえ、記録の類ではこれが用いられる。裏曲の名は、江戸後期以降に撰集の名によりつけら

れ、文学史の用語として用いられるに至つた。【撰集】『宴曲集』『宴曲抄』『真曲抄』『究百集』『拾菓集』『拾菓抄』『別紙追加曲』『玉林苑』の八部十六冊の撰集(六一曲所収)と『外物』(十二曲)の形で伝わる。撰者は明空(みくわ)晩年月江と改名)。ほかに、曲の一部を変えたり付加して歌う異説四十八首を集めた『異説秘抄口伝巻』と、同じく異説にならって作った両曲四十八首を集めた『撰要両曲巻』がある。【成立】鎌倉中末期。右の撰集が成つたのは、永仁四年(二五〇)の少し前から文保三年(三二五)までである。所収曲の成立年代は、まれに古いものもあるが、明空の年齢から考えて、大部分は、文永(二四二-二五三)以前にはさかのぼらないと思われる。『拾菓抄』『別紙追加曲』の「調巻後日出来」の注記により、後期には撰集と実作の時期はほぼ同時とみられる。【作詞作曲者】『撰要目録巻』には曲ごとに作詞者と作曲者が記されている。撰者の明空が作詞一〇二曲(ほかに他作の改訂三十一曲)、作曲一三四曲と圧倒的に多いが、その他三十数名が官職名で書かれている。これらの作者達の比定者は、藤原広範・冷泉為相・飛鳥井雅孝などの公家や、明空・素月・漸空などの僧侶で、関東へ下つたり、この方面に関係の深い人々と、金沢貞頼・二階堂行時・北条春朝・比企助員など、鎌倉幕府御家人の武士達に求められる。公家が作詞者であるのに対し、自分で歌えなければならぬ作詞者として武士が多く名を連ねている。【伝流】『異説秘抄口伝巻』の識語により、秘伝を相伝した早歌の名手の一列がわかるが、月江から、源信貞(坂口盛勝(坂阿)→同盛幸(口阿)→山内盛通)→高橋富職と約三十年ごとくに伝えてい

る人々は、武家将軍側近の武士である。他にも、口阿と車の両輪のようにいわれた田島清阿(盛阿)・蔭山入道実阿をはじめ、土岐・畠山・山名の大名や、神保・三島・金山・斎藤・朽木・杉原・四宮など、将軍の近侍か大名の被官人など、早歌の相伝者は、同じ階層の武士であった。こうして、室町期には中興の祖といわれる坂阿・口阿父子(観阿弥・世阿弥と同時代)が出、口阿には『郭曲拔萃』(童門文庫本ほか)が残されている。心敬の『ひとりごと』には坂阿・口阿、坂阿の門弟清阿の名が見える。【享受層】早歌は成立当初から武士が自分で歌つたものであり、以後中世末期まで、武士を中心にかなり広い階層によって享受された様子が、記録の類によつて知られる。応永十五年(四〇三)三月二十四日、北山殿に後小松天皇を迎えての早歌の会には名手五人が歌う(教言卿記)など、記録の上では室町幕府関係のものが多いが、大内氏による周防国仁平寺再興の際の延年の中で歌われるなど、全国的に広まった。【曲目】現存の早歌一七三曲にはすべて曲名がある。曲は生活の全般にわたる、分類もしがたいほどである。【宴曲集】には、四季・賀・恋・雑上・雑下の部立があり、曲名も、花・秋興・花亭祝言・袖湊・海辺など、歌題や詩題に類するものが多いが、『宴曲抄』以後に部立はなくなり、曲名にも、郭律講物礼(講物)・筆徳・隠徳・三島詣・君臣父子道・隨身競馬興・余波(余波)など、早歌独自のものがめだつようになる。【曲節】早歌の伝本には、ごま点・垂れ鍵や五音(宮・商・角・徴・羽)など、詳細な墨譜・朱譜が付されているが、江戸期以降歌われなくなつて久しく、まだ説明が十分ではない。曲節は八拍に長短句をあてはめ

る拍子に合う部分(拍律)は後の能謡とほぼ同じ)を中心とし、曲頭や曲の途中にある延曲という拍子に合わない部分とからなり、かなり高度の技法の発達をみたもようである。【詞章】長編であり、大体謡曲のクセの部分の長さを平均とする。曲名に徳・誉・靈験・勝景など、讃嘆の意を含むものが多いことが示すように、自然物・身近の器物・動植物・特定の寺社など、何であれりあげ、その素材の勝れた特質を讃嘆することにより、現当二世の願望を祈願するものである。詞章中に、日本・中国・印度三国にわたる古典からのおびただしい引用がみられるが、佳例をあげ佳句を引くことが、右の祈願に不可欠であるとの考えに基づくものと思われる。「海道」「熊野参詣」「善光寺修行」という連作物の長編道行が三種あるが、他の曲も、懸詞・縁語・頭韻の多用をはじめ、種々の点で道行に近い特質をもつ。【影響】早歌の「海道」は、延慶本『平家物語』の重衡東下りには原文のまままでとりいれられ、『太平記』の道行への影響も指摘されている。『閑吟集』には小歌にまじつて、早歌の一節が八首とられた。これは水山の一角で、曲節をもつて歌われる新しい韻文形式である早歌の詞章は、能・浄瑠璃をはじめ、以後の文学に多大の影響を及ぼしたものと考えられる。しかしながら、対象の美質を讃嘆するという、仏教信仰に類する中世的傾向は、近世社会には訴えかける点が少なかったためか、江戸時代に入ると歌われなくなった。

年。○武石彰夫「仏教歌謡の研究」昭和44年。○外村南都子「早歌の曲名について」『遠玄』を中心として(『国文白百合』昭和49年3月)。○横道万里雄「早歌の新旧」(『中世文学の世界』昭和35年)。

雑歌 和歌の内容による分類上の呼称。歌集の部立として言われることが多

い。【万葉集】「相聞(むすぶ)挽歌(むか)」とともに、『万葉集』における三大部立の一つ。私的な情を伝えあう相聞、人の死を悼む挽歌に対して、雑歌は、編纂の時つねに最初に配され、国見・遊獵・行幸・遷都・集宴など、宮廷生活の晴の場でうたわれたさまざまの歌、および、そのような場で発達をたげた詠物歌などを収める。「雑歌」の部立をたてる巻は、一・三・五・六・七・八・九・十・十三・十四・十六の、合計十一巻である。このうち、巻一・五・六・十六は、一卷すべて雑歌で構成されている。巻八・十は、「春雑歌」「夏雑歌」のように、さらに四季に分類し、巻十四(東歌)は、国名明記のものとの不明のものに分けている(国名明記部に「雑歌」の標示がないのは、伝来の過程で脱落したためと認められる)。また、巻五が「日本挽歌」(古語)等を含みながら「雑歌」の部立をたてるのは、それらが喪葬儀礼とは関連の薄い観照の作詠的作品と意識されたためであり、巻十六が伝本によつて「由縁」に有る雑歌「由縁有ると并(な)せて雑歌」両様の標示をもつのは、前者が原形と判断される。「雑歌」の名は、前者が原形と判断される。「詩」の部の最後に「雑歌」「雑詩」「雑擬」の部立をたてて(巻二十八―三十一)、

【参考文献】外村久江「早歌の研究」昭和40年。○乾克己「宴曲の研究」昭和47年。○新間進一『中世近世歌謡集』(日本古典文学大系)昭和34

〔外村南都子〕

「補」以下「挽歌」の部立に属さない諸の詩を収め、雑の部を構成している。相聞にも挽歌にも属しない『万葉集』の雑歌は、この「文選」の雑の部の性格を参照しながら、その雑の部の初頭にあって、あたかも倭歌にあつらえむきの「雑歌」の名を借り来たつたものと考えられる。典拠を当代の模範的詩文集「文選」に求めたのは、『万葉集』雑歌が宮廷生活に密着する晴の歌の集合であつたことにもとづく。もつとも、「雑歌」の語は、『万葉集』と関係をもつ中国の文献のうちでは、ほかに『玉台新詠』にも見える。だが、それは、部立の名としてではなく、題詞として現われるだけであり(巻十「近代雑歌三首」とある一例のみ)、「雑歌」の典拠を『玉台新詠』に求めうる可能性は乏しい。一方、『万葉集』の「雑歌」命名の時期は、『万葉集』の数次にわたる形成過程のうち、元明天皇の発意によって歌集が二巻本に成長した段階、すなわち、公的な宮廷歌を集めた巻一原形(前半部に相当する部分)が同類の歌の増補をうけるとともに、それに併せて相聞と挽歌とからなる巻二原形が形成された時であろう。相聞と挽歌と二種の歌が類をもつて集められたからには、対比的に巻一に名をつけなければならぬ。そこで、「文選」を参照しながら考案されたのが「雑歌」であつたと思われる。このような命名の事情が明らかになると、「雑」を名の部立が『万葉集』の巻頭に据えられたことに対する古来の疑問も氷解しよう。同時に、もう一つの不審、「雑歌」がおもに歌の場にもとづく部立であるのに対して、「相聞」挽歌が主として歌の内容による部立であり、名義にずれがある点にも、理解がとどくであろう。『万葉集』三大部立

のうち、「挽歌」は葬制の変化にとまなつて、はやばやと衰退し、哀傷歌と変質してしまひ、「雑歌」と「相聞」だけが平安朝にいたるまで命脈をたもつた。このうち、相聞は、恋を中心とする私的交情の歌という性質上、恋歌として主として女性の世界にうけつがれ、歌物語へと展開した。それに対して、雑歌の主流は、男性の世界を中心として伝えられ、六歌仙の出現、歌合の盛行を経て、紀貫之らによる和歌復興運動につながり、ついには「古今集」の成立となつてゆる国風暗黒時代にあつても、『万葉集』以来の「雑歌」の命脈は、絶たれることがなかつたのである。『古今集』の読人しらずの歌の検討によれば、この命脈の伝来に大きくあずかつたのは、『万葉集』二十巻に認証を与えた平城天皇およびその側近の人々であつたらしい。(伊藤 博)

【中古以降】『万葉集』において和歌の分類の柱をなしていた雑歌・相聞・挽歌は、中古以降は部類・部立の細分化や変容によって全く趣を異にすることになる。相聞は恋歌、挽歌は哀傷歌へと、多少性格や内容を異にしながら継承されていくが、雑歌は名称は同じものが見られるものの、性格や内容はすっかり変つてゐる。宮廷文学の晴の場における和歌としての雑歌に該当するのは、六歌仙時代以後の和歌の宮廷文学としての復活に伴つて平安時代に入つてもしきりに詠作され、その典型的なものは恋歌と共に王朝和歌の中心を占める四季歌であるが、平安時代では四季・恋・賀・哀傷・離別・羈旅といった明確な分類基準を持った部類・部立に入らない、その他のさまざまに歌が雑歌となるのである。『文華秀麗集』や

『経国集』などの勅撰漢詩集には「雑詠」の部立が設けられ、四季自然詠などを中心としたものも詩が収められており、雑歌的な性格が認められる。大江千里の「句題和歌」に至つて、四季・風月・遊覧・述懐と共に「雑」の部立が初めて見られるようになるが、伝本によつて「離別」となつており、内容的にも離別歌的な性格が濃いので必ずしも信が置きがたく、『古今集』に至つて「雑」の部立が新設されたとする方が正確かも知れない。『古今集』では「雑歌」は上下二巻に分かれ、宴席・交友・宮廷行事など集團の場における歌、懐旧や歌老など述懐の歌、月・海・滝など無季の自然や、造花、屏風絵の景物など人工の自然を詠んだ歌などが上巻に収められ、無常・厭世・流滴・免官・荒廃・転変・不遇など失意逆境を哀歌する歌などが下巻に収められている。すなわち述懐歌を中心として歌材や主題などが他の部立の中に入りがたい多様な歌が雑歌として扱われている。『古今集』には「雑詠」の部立があり、長歌・旋頭歌・誹諧歌など形式や風体を異にする歌を収めているが、これも雑歌の中に含めて考えることができる。『拾遺集』では、雑下の巻に問答歌・誹諧歌・旋頭歌が収められている。『古今集』以後、「雑歌」は歌集の重要な部立となり、『後撰集』では四巻、「拾遺集」では二巻の他に「雑春」「雑秋」「雑賀」「雑恋」という複合的な部立が見られ、『後拾遺集』では六巻(雑六)は神祇・釈教・誹諧歌というように、勅撰集では十巻のものでも二巻、二十巻のものでは三巻または四巻も雑歌が占め、分量的には四季歌や恋歌に次ぐ大きな位置を占めるに至つてゐる。私撰集でも、『新撰和歌』

に雑歌が見られ、『夫木和歌抄』などでは、四季歌と雑歌とが二大部類となつてゐる。私家集でも、『貫之集』や『散木奇歌集』など部立を持つてゐるものにはやはり雑歌が見られる。堀河院御時百首和歌も四季・恋・雑が百首題の柱となつており、ここでは「旅」「別」「無常」「祝詞」も雑二十首のうちに含まれてゐる。すなわち、羈旅歌・離別歌・哀傷歌・賀歌等も広義の雑歌に含まれることを示している。このように雑歌は幅広い内容を持った部類として、四季歌・恋歌とともに和歌の世界で鼎立するに至るのである。(小町谷照彦)

【参考文献】石井庄司「雑歌・四季雑歌論」(万葉集講座6、昭和8年、春陽堂)。○五味智英「万葉集の分類と支那文学」(国語と国文学)昭和13年4月。○津之直「雑歌」(万葉集講座4、昭和48年、有精堂)。○伊藤博「相聞の意義」(万葉集の表現と方法・上)昭和50年。○同「万葉から古今へ」(万葉集の歌人と作品・下)昭和50年。○佐藤謙三「八代集の雑歌」(平安時代文学の研究)昭和35年。

造化軒 けんか 浄瑠璃作者。生没年未詳。【閏歴】延宝六年(六六)八月刊宇治加賀掾の最初の段物集「竹子集」の跋を、「洛東野夫造化軒」の名で記している。それによれば加賀掾の門に入って嘉太夫流の浄瑠璃を樂しみ、師に秘伝を乞うたところ「竹子集」を与えられ、それを山本九兵衛に頼まれ提供して出版するに至つたと刊行事情を述べてゐる。その洒脱の文辞からみると俳諧師でもあつたものと思われ。元禄末年(一七三〇)刊「南大門秋彼岸」の役人替名の条に「浄るり作者」として「造化」の名が見えるが恐らく同一人であろう。この作は近松の「日本西王母」との前後関係が問題とな

っている曲であり、もし『南大門』が先行するとすれば造化軒が作者の栄を得、また逆とすれば彼は単なる改作者の位置を占めるにすぎなくなる。〔信多純一〕

桑華書志しんか 三十一冊。随筆・考証。

書目。前田綱紀著。宝永元年（享保八年）七四（一七三）記。加賀藩第五代藩主で、典籍・古文書の収集に努めた著者が、入手または見聞した書籍に関する諸事をした筆記。名称は、扶桑・中華つまり和・漢の書籍について書きしるしたもの。意。原本が尊経閣文庫に伝わる。故紙の紙背を利用した袋綴の横帳で、一部侍臣などの他筆をまじえるが、大部分は自筆。【内容】座右に置いて逐次記入したらしく、内容は必ずしも十分に整理されていない。現在「求遺書」と題簽にしているもの十冊、「家蔵書」十四冊、「見聞書」七冊に類別される。「求遺書」と題する冊には、多くは入手または書写した書物について、その経緯（出所・取次者・価格）、内容に関する観察・評価などをし、し、「家蔵書」の冊には、蔵書の序跋・目録などを抜書きしたものが多く。「見聞書」の冊は寓目した書物についての備忘録的な筆記が中心になるが、三類の記載の別は明確でない面もある。綱紀の蒐書の記録として重要であり、また『古蹟歌書目録』（守覚法親王の蔵書目録か）のように、今は所在を失った書物について、内容が抄出されていたり、体裁・奥書など書誌的な記述が残されていたりして、貴重な手掛りを提供する例も多い。さらに綱紀の観察・評価にも研究史上注目すべきものが散見する。なお綱紀には本書と同体裁の『桑華字苑』『桑華雜記』の著があり、『求遺書目録』も同

類の筆記である。

〔飯田瑞穂〕

【参考文献】近藤雄雄「加賀松雲公」明治42年、私家版。○太田晶二郎「桑華書志」所載「古蹟歌書目録」（『日本学士院紀要』昭和29年11月）。

創学校啓そうがくけい 一冊（草稿本）。国学。

*荷田春満（按）著か。「創学校啓」は通称で、「創国学校啓」「創造国学校啓」「荷田大啓」「荷田翁啓文」と称せられることもある。享保十三年（一七三〇）春満が弟の信名と計り、昌平黌などの儒学校に対して、皇国学校の学校を京洛の地に建設することを幕府に請願した漢文の上申書で、養嗣子荷田在満が江戸に持参し、御家人某を通じて上申することになった、と信名の手記にある。この手記にも疑問が提出され、計画そのものも疑われているが、全くの虚構とす理由もない。【内容】徳川幕府の世となつて昌平黌が作られるなど文運の盛んになったこと、また春満が校書の恩命に浴したことを喜び、当時將軍家の庇護により和学の学校設立の素志を遂げんとしたが、力量の不足を思つて時を俟つことにしたが、今病に侵され、坐して生を終るに忍びず、また世上徒らに儒仏の学のみ盛んで、わが国古来の道を学び、これを興復する気力と勇氣を今にして振り起さなければ、時を失うと思われ。京洛に土地を賜わり、「皇国の学校」を開設したい。今日まで自分が蒐集して来た文献資料をこれに提供し、志ある学者の用に供するならば、人材も集まり、国祚悠久の利益となる。国学の講ぜられざること六百年、古語に通じなければ古義は明らかにならず、古義が明らかになれば古学の興復は不可能である。臣が力を

尽す所以もここにある。ここに意をとどめて上達してほしい、という趣旨である。草稿本では、幕府奥小納戸役大島運平に宛ててある。どこまで計画が進められたのかもよくわからないが、この中に古語「古義」国学という国学の基本的な方法が述べられていることは注目すべきである。【諸本】羽倉家に草稿本と思われる一本が伝えられている。刊本の文章とかなり異なるが、趣旨に交りはない。刊本には、寛政十年（一七九八）刊「春葉集」の後冊に付録として収められたものの他、安政六年（一八二五）刊本「福羽美静校」・慶応二年（一八六六）刊本「平田鏡胤校」等がある。【複製】「荷田大人創学校啓」（山田孝雄、昭和15年）。【翻刻】「荷田全集」・続々群書類従10。日本思想大系「近世神道論・前期国学」。〔阿部秋生〕

宗鑑そうかん 連歌作者。俳人。本名・出自・生没年・閨歴等諸説があつて定説がない。支那氏、本名弥三郎範重（頭伝明名録、雑々拾遺ほか）、あるいは範水（頭伝明名録書入本）。近江の人といひ、近江源氏佐々木隠岐前司義清の末裔（雑々拾遺）、あるいは山崎離宮八幡神職井尻氏の子（頭伝明名録書入本、日次紀事）、また一説では八条之小野光家朝臣六代の孫（疑源抄）とも伝えられるが、いずれも確証を得ない。のち洛西山崎に庵住して世に山崎宗鑑という。没年は、謬本「百万」の奥書「天文己亥（八年）二月日、宗鑑（花押）」および京都大徳寺真珠庵六世紹派濟嶽（天文十年正月十一日没、六十九歳）が、「宗鑑庵主七月二十一日」と記録した真珠庵の過去帳により、天文八年（一五七五）または九年の七月二十二日没。また享年は、奈良興福寺の記録「習見聴診集」の

「天文癸巳（二年）小春十三日、行年七十有餘、宗鑑（花押）」より勘案して、七十七歳から八十六歳ぐらいかと推定されている（木村三四吾説）。辞世の狂歌が「古今夷曲集」巻九に「背に癩瘡出来て身まかる時よめる／辞世、宗鑑はどちへと人のとふならばちとよありてあよへといへ」とあるが信を置きがたい。また最晩年は梅谷和尚をしたいた讃岐観音寺の興昌寺内に一夜庵を結んでそこで没し（一夜庵建立縁起）、墓塔もあつたといふへまのこのすさび、日本行脚文集が、これも確証を得ない。【閨歴】將軍足利義尚あるいは義輝に仕えたといわれるが、主君の陣没により出家し、摂津尼庵あるいは山城新村に隠栖し、のちには山崎に移り住んだ。宗鑑は一休宗純門の連歌師宗長との交流により、一休ゆかりの大徳寺真珠庵や新の酬恩庵とは法縁が結ばれたよう、延徳三年（一五二〇）の真珠庵開きをはじめとして、明応二年（一五二五）の一休十三回忌、永正七年（一五二〇）の一休三十三回忌等には、宗長とともに銭を寄進している。また酬恩庵では、『宗長手記』によれば、大永三年（一五二二）の越年に「酬恩庵傍捨寮下、炉辺六、七人集りて、田菜の塩燻のついで俳諧たび／＼」に及んで、宗鑑も一座して俳諧に興じており、その作品は「犬筑波集」にも入集している。晩年山崎に隠棲したことは、享祿三年（一五三〇）八月九日付の真珠庵桐椿首座宛ての宗鑑書状「真珠庵文書」に山崎よりと誌されてあり、確実であると思われる。山崎の閑居は妙喜庵もしくは対月庵といわれ、その位置は関戸の院のほとり（玉海集追加）、あるいは離宮八幡北の竹林の中（菟菟泥赴）と伝えられる。その草庵の様子は柿衛文庫蔵「風寒し破れ障

「天文癸巳（二年）小春十三日、行年七十有餘、宗鑑（花押）」より勘案して、七十七歳から八十六歳ぐらいかと推定されている（木村三四吾説）。辞世の狂歌が「古今夷曲集」巻九に「背に癩瘡出来て身まかる時よめる／辞世、宗鑑はどちへと人のとふならばちとよありてあよへといへ」とあるが信を置きがたい。また最晩年は梅谷和尚をしたいた讃岐観音寺の興昌寺内に一夜庵を結んでそこで没し（一夜庵建立縁起）、墓塔もあつたといふへまのこのすさび、日本行脚文集が、これも確証を得ない。【閨歴】將軍足利義尚あるいは義輝に仕えたといわれるが、主君の陣没により出家し、摂津尼庵あるいは山城新村に隠栖し、のちには山崎に移り住んだ。宗鑑は一休宗純門の連歌師宗長との交流により、一休ゆかりの大徳寺真珠庵や新の酬恩庵とは法縁が結ばれたよう、延徳三年（一五二〇）の真珠庵開きをはじめとして、明応二年（一五二五）の一休十三回忌、永正七年（一五二〇）の一休三十三回忌等には、宗長とともに銭を寄進している。また酬恩庵では、『宗長手記』によれば、大永三年（一五二二）の越年に「酬恩庵傍捨寮下、炉辺六、七人集りて、田菜の塩燻のついで俳諧たび／＼」に及んで、宗鑑も一座して俳諧に興じており、その作品は「犬筑波集」にも入集している。晩年山崎に隠棲したことは、享祿三年（一五三〇）八月九日付の真珠庵桐椿首座宛ての宗鑑書状「真珠庵文書」に山崎よりと誌されてあり、確実であると思われる。山崎の閑居は妙喜庵もしくは対月庵といわれ、その位置は関戸の院のほとり（玉海集追加）、あるいは離宮八幡北の竹林の中（菟菟泥赴）と伝えられる。その草庵の様子は柿衛文庫蔵「風寒し破れ障

子の神無月」の僧体の自画像に描かれてい
る靈屋に近いものと想像される。山崎では
竹を切って油筒を作り、それを売って風狂
の生活をささえたともいわれ、また宗鑑の
筆蹟が多く残っているところから、はやく
宗牧の『当風連歌秘事』でも指摘される特異
ないわゆる宗鑑流の筆蹟で、『和漢朗詠集』
や『古今和歌集』『新古今和歌集』『伊勢物語』
等の古典類、あるいは三社託宣等を筆写
し、それによって生計を立てていたのでは
ないかと想像される。宗長との交流の他
に、『守武千句』跋に「宗かんよりたび々
発句などくだし侍り」とあり、守武との関
わりもあつたと思われる。

【作風】連歌師としては、長享二年(四六〇)
三月、能勢頼則興行の千句三つ物(能勢頼
則千句三物)があつて、第四の三つ物「く
れゆくを花のおしまん春もがな当柏)／露
ものいはぬ山吹のいろ(正純)／霞にも岩も
る水の音はして(宗鑑)で、宗鑑の第三が
示されている。この千句の連衆は宗祇・当
柏らや、正種・正兼ら摂津池田氏関係の
人々が中心である。ついで近年新出の資料
に、宗鑑自筆「延徳四年三月三日第三賦初
何連歌」二巻がある。この一巻は「さげばさ
く花は心の一木哉(正盛)」を発句とする百
韻で、宗鑑は六句目に「みねのあらしに月
のこるみゆ(実任)／秋やはや鶴が音さむし
深ぬらん(宗鑑)」の付句一が入集。作者は
正盛五、宗長十七、里貞三、実任四、正種
二、正存五、寿月二、宗益九、宗殿六、宗
祇十五、当柏十一、正伝六、専向三、仙孝
五、頼則四、宗臨一、宗鑑一とあり、長享
二年のものと同様、宗祇・当柏らや宗長・頼
則との関連が見られる。宗鑑の連歌の所伝
は、現在のところ確実なものはこの二例だ

けで、前例では付句に一種の機知が感ぜら
れるがとりたててその特長はなく、おそら
くは中央での連歌活動はごくわずかで、地
方の山崎の靈泉連歌講などに関連して活躍
していたものと思われる。俳諧では彼の編
んだ享禄末から天文初年成立の『犬筑波集』
が、明応八年(四七五)成立の『竹馬狂吟集』に
ついて最初期の俳諧撰集として重視されて
いる。『犬筑波集』では作者名の記載がな
く、宗鑑の作品がどの程度収められている
か判断としないが、『宗長手記』の大水三年
酬恩庵での宗鑑名を記す付句二例が採用さ
れており、これらは確実に宗鑑の作品と考
えられる。「をひつかん／＼とやはしるら
ん／高野ひじりのあとのやりもち」碁盤の
うへにはるは来にけり／うぐひすのすごも
りといふつくり物)がその二例だが、前者
は街道の世相を動的に描き、後者は碁の手
を考える人の姿を描出する。なお、自筆で
宗鑑作と考えられる発句を示せば、「に
が／＼しいつまであらしふきのたう」満ま
るに出てもながき春日哉「うづききてねぶ
るとに鳴や郭公」猿の尻木がらししらぬもみ
ち哉等があり、これらや『犬筑波集』所収
の諸作品から、現実的で卑俗・滑稽を主と
する室町期俳諧のおおらかな笑いの実態が
理解できよう。こうした宗鑑や『犬筑波集』
の俳風は、後世とりわけ談林派の人々に大
きな影響を与えている。なお筆蹟において
も、その流儀はいわゆる宗鑑流として伝え
られた。

【編著】『犬筑波集』の他に、『竹馬狂吟集』
『疑源抄』『一貫抄』等が宗鑑の編著に擬せら
れているが、『竹馬狂吟集』は別人の編著で
あり、『疑源抄』は立圃の『はなひ草』を利用
した偽書で、また『一貫抄』は伝書というが

未詳である。

【付記】当時の同名異人に大徳寺七世是庵
宗鑑あるいは典葉頭半井宗鑑がおり、しば
しば混同されている。
〔雲末雄〕

【参考文献】頼原退蔵「山崎宗鑑伝」(頼原退蔵
著作集2、昭和54年)。○吉川一郎「山崎宗鑑
伝」(昭和30年)。○木村三四吾「山崎宗鑑」(俳句
講座「俳人評伝」上、昭和33年、明治書院)。○
尾形竹宗「宗鑑と守武」(『俳諧史論考』昭和52
年)。

桑嶋唱和填塵集

一卷十一冊。漢詩文。奎文館主人(瀬尾用
拙齋)編。享保五年(一七三〇)刊。八代將軍吉
宗の將軍職襲位を賀して、享保四年秋に来
日した朝鮮通信使の一行と、日本の学者文
人との漢詩の唱和や筆談の記録を編集上梓
したものである。松山藩の儒者前田時棟の序文を
付し、巻一の巻頭に「列朝韓使來聘考」とい
う一文と、「韓使官職姓名」という使節一行
の氏名一覧を掲げる。【内容】巻一―九

は、東武・尾州・濃州・江州彦根・江州大津・
浪華・備後防州上関と、使節一行の立ち寄
った地域ごとに分け、各地での詩の応酬と
筆談を記録する。巻十は「韓客筆語」と題さ
れ、編者と使節一行との筆談の記録で、編
者の自序を付す。全般に日朝の友誼的に関
係を反映した内容となっており、筆談は詩
文に関するもののほかは、医療についての
話題が多い。朝鮮側では製述官の申維翰
(青泉)と姜伯(耕牧)・成夢良(嘯軒)・張応斗
(菊溪)の三人の書記が主に應對し、日本側
には木下蘭阜・水足屏山・伊藤電洲・宇都宮
圭齋・朝枝毅齋などの名前がみえる。

〔挿葉 高〕

【参考文献】李進熙「李朝の通信使―江戸時代
の日本と朝鮮」昭和51年。

宗 祇 連歌作者・古典学者。江戸
時代の俗説によれば、飯尾氏であるとい
う。庵号を種玉庵・自然齋・見外齋。文亀二
年(一五三)七月三十日没、八十二歳。享年か
ら逆算して応永二十八年(四三三)、『廻国雑
記』の後付の宗祇伝によると七月二十日の
出生。【出自】生国については室町期には
「江東の地」(庵主肖像賛)、すなわち滋賀県
東部とされていたが、江戸期に入って紀伊
国有田郡藤並庄吉備野という詳細な地名ま
で伝えられ、以後江戸時代三百年の間流伝
した。この近江から紀州への突然の変化は
江戸幕府の御連歌師の紹巴あたりの所伝が
流布したものらしいが、両説いずれとも決
しがたい。また一説には伎楽師の子ともい
われている(日本古今人物史、種玉庵宗祇
伝)。いずれにしろ、宗祇が地方出自の氏
もない庶民らしいことは、後年の彼の著作
や行動から推測される。

【事蹟】年若く上京、そのまま万年山相国
寺の僧坊で苦しい仏道修行を続けていた
が、生来、機智洒落に富んだ性格だったら
しく、地道な仏道修行に見切りをつけて和
歌・連歌に専念するようになったのは、三
十歳余りであった(浅茅・序)。青少年期を
修道的な仏門で過ごし、風雅の経験がなか
っただけに、三十歳すぎからの和歌・連歌
の修練ははげしく、夜を日につぐ精進努力
をつづけた。和歌は飛鳥井雅親、古典・有
職は一条兼良、連歌は宗砌・専順・心敬らに
師事して骨身をけずる修練十五年、四十歳
半ばすぎになってようやく専門連歌師・歌
人としての地位を獲得した。神道を卜部兼
俱に、美濃郡上の城主東常縁(常縁)から
『百人一首』や古今伝授の歌学をうけ、三条
西実隆とはとくに親しく、また忠実な古今

伝授の継承者であり、その他の弟子に肖柏・宗長・惠俊・宗頌・玄清らがある。宗祇の青少年期の確かな史料はないが、寛正二年（四二）正月一日の『何人百韻』は、専順の発句を起句（ひきご）にした宗祇独吟で、現存する最初の作品である。この四十一歳の作品は、当時毎年のように師専順の発句でよまれた稽古修練の百韻の一つであつたらう。その頃、宗祇は粟田口に近い白川沿いの草庵や嵐山法輪寺近くの庵で、和歌・連歌や『伊勢』源氏など古典研究に明け暮れつつ、一方では奈良吉野・伊勢などの名所旧跡探訪の旅を続けて豊かな詩想の育成につとめていた。伊勢の北畠氏、越後の上杉氏とは夙く親密で、文正元年（四六）夏の関東下向では、同地の豪族長尾氏、太田道真、道灌父子と交誼をもち、『藻塩草（長六文）』角田川（吾妻問答）の連歌賦詠の作法書を書き与え、応仁二年（四七）秋には、結城氏の招きをうけて白河の関を訪れている（『白河紀行』）。文明三年（四七）正月と六月の二回、関東で常縁に『古今集』の講釈をうけ（『古今和歌集二度聞書』）、いわゆる古今伝授をうけた彼は、翌四年冬帰洛の途に就き、同五年秋には尼門跡三時智恩寺に隣接する竹林に種玉庵を建て、第一句集『萱草（むら）』や先賢七人の句集『竹林抄』などを撰するとともに、非凡な努力と才能は世人に認められ、細川・畠山ら管領以下京都在住の諸豪族たちの雅会にも立交るまでの名声を得た。一方、多年にわたる古典研鑽の成果を、肖柏はじめ弟子たちを相手に、『伊勢』源氏の講釈（『種玉編次抄』『弄花抄』）『伊勢物語肖聞抄』を試みて日を送っている。文明八年正月の幕府恒例の連歌会始め初めて人数として召加えられ、翌九年の七

夕には、將軍夫妻を招いての『七夕歌合』の判詞を乞うべく、奈良興福寺成就院に疎開していた兼良のもとへの使者をつとめ、その帰路賊に襲われるという事件があつた。文明十年春から翌年秋にかけては、当時宗祇と名のる弟子宗長を伴って関東・越後に遊び、同国守護上杉房定などに『伊勢』や『百人一首』を講釈し、北陸へ迂回して越前の守護代朝倉氏景の一乗谷城では『老のすさみ』を著わし、先年撰集した『竹林抄』の七賢の句を中心にして、中古・当世の連歌風体の違いを懇切に教示した。文明十二年六十歳の夏、西国の大名大内政弘の招きに応じ、山口に下り、関門の平家一門の旧跡、筑紫の太宰府まで足をのばし、北九州の名所旧跡の旅を試み、『筑紫道記』を記し、肥後八代の城主相良長毎に自分の発句を比較注した『宗祇発句判詞』、雅言歌詞の詳注『分葉（ぶん）』を書き与えたり、帰洛の後は政弘の求めに応じて第二の句集『老葉（ら）』初編を撰ぶ一方、肖柏や実隆、近衛政家・尚通父子たちに『源氏』や『古今』を講釈し、長享元年（四七）閏十一月には、伏見宮第に勝仁親王（後柏原天皇）・邦高親王などの皇族貴紳たちに、師弟の礼をもって『伊勢』を講義するまでの名譽を得た。そして翌二年三月には当時連歌界の最高の名譽職である北野社連歌会所の奉行職と將軍家師範としての宗匠職に任ぜられた。その後、明応元年（四九）前後には第三の句集『下草（した）』（初編）を撰び、同四年六月二十日（実際は九月二十六日奏覽）には、政弘の奏請によつて、当宗匠兼載の二人が中心になり、公家からは実隆、武家からは二階堂行二らが参加し、肖柏・宗長らの助力を得て、連歌第二の准勅撰集『新撰菟玖波集』を完成し奏

覽した。この撰集には俳諧連歌の句を採用せず、全巻純正連歌で統一しているのが注目される。これは、とりもなおさず宗祇・兼載ら当代連歌界の志向する正風連歌の風体と典型を世に示そうとする態度であつたらう。明応八年正月、宗祇は内心、離京の志があつたらしいが、京都周辺にはいまだ応仁の乱の余燼がくすぶり戦乱が絶えず、そのために心ならずも、ある種の政治の裏面工作にたずさわりながら、自発句集『宇良葉』を撰び年を送つた。翌九年すでに八十歳の宗祇は、父子三代にわたつて恩義をうけた越後の上杉房能のもとへ第七回目の旅を試み、かの地で『古今集』の講釈をし、さらにその翌年秋には病に倒れ再起不能を知つたのか、京の実隆のもとへ『古今集聞書』以下の古今伝授の相伝文書一箱を送り届けている。文龜二年二月末、もはや帰洛の望みさえむつかしく、せめて「富士をも今一度見侍らん」といつて、看病に駆けつけた宗長・宗頌らに守られながら信濃路から伊香保・江戸・相模への旅をつづけて七月三十日箱根の湯本で、灯火の消えるように八十二歳の生涯を終えた。

【作風】庶民階級に生れ、しかも年三十過ぎの晩学でありながら刻苦勉勵、人に倍する努力の結果、和歌・連歌のみならず古典研究の權威として上下の人々から仰がれた宗祇は、室町時代の文化人の典型といえるであろう。彼の古典研究は、自らの駄洒落に類する頓智の才「非風雅」を自覚すればするほど、伝統的な古典の風雅を通して真の風雅をわがものにしたに願ひに発したものであつたとみられる。そして古典講釈においては、彼は天皇皇族はじめ、公卿貴紳たちから師としての待遇をうける一方、古今伝授の学統を確立して後世に大きな影響を残した。まさに下剋上の中世の代表的人物とも評しえる。宗祇には、心敬ほどの思弁的思想体系はないが、連歌は和歌の一体という伝統的連歌観にたち、呼びおこされた作者の感動をいま一度対象に投入し感情移入して、その感動を美しく格調高く描きだす有心体を詩情の本質と考え、また最高の風体とも考えた。それは宗祇のもつ暖かい愛情が対象へ通ひ、彼のすなおな和と誠の心が世界を被ひ包む姿であつて、戦乱の苛酷な世に生きねばならない非力ではあるが誠実な人間、庶民の願ひでもあつたと思われ。宗祇の連歌は、伝統的連歌の正統をうけついで、心敬流の感嘆の冴えはないにしても、宗祇流のとりなしと専順の雅馴な表現とを兼ねて、彫琢推敲のうちにえられた調和と諧調の美しさである。その美は、古典に描きつくされた伝統的な美であり、観念化され典型化された風雅、『古今集』的美への憧憬である。以下、若干の句を例示して、その作風を探つてみる。「花ぞさくいづれの山か宿ならん／籠（かご）」にみる鳥の春のあはれさ（『老葉』）。どの山も、見渡すかぎり満開の桜、さて何処の山に宿りしようか迷つてしまふという前句を、付句では一転して、鳥籠の中の鳥には春だというのに帰るべき山もない、籠の鳥のみなしさに転じたとりなしの句であり、花盛りの素晴しさにうたれた歎びは、反転してそれも出れない、心なき鳥へ感情移入した愛を唱いあげた有心体でもある。「雲なき月のあかつきの空／さ夜枕しぐれも風も夢さめて」（『老葉』『新撰菟玖波集』）。はつと物音に独り寝の夢がさめると、暁天には一片の雲もない冴えた月がかかっている。たしか、時雨

だつたか風だつたか、物音に驚いて目覚めたと思つたが、時雨も風も夢だつたのかしら、という暁の縹渺とした心理の綾を表現した幽玄な句である。「世にふるもさらに時雨のやどり哉(萱草)」。応仁の乱の頃、信濃の山中での詠だという。「新古今集」冬の二条院讀岐の歌「世にふるは苦しきものを楨の屋にやすくもすぐる初時雨哉」を本歌にしたもので、「世にふる」とは世に経る」と時雨の「降る」の掛詞、「時雨の宿」とは時雨の通り過ぐる一時(ひと)の雨宿りにすぎない苦しい此の世の生活、そう観する自分にさらに降りかかる時雨である。本歌の情趣を背景に乱世の悲しい非力を諷いあげた作といえる。「月の秋花の春たつあしたかな(萱草)」。『萱草』『老葉』の巻頭をかざつた文明二年元旦の発句。春の花、秋の月はとも一年を通じて風雅人のもつ憧憬と願望である。そうした期待と念願に迎えられて明けようとする新春の詠嘆である。この句には、人を感動させる風景も印象もない。あるものは典型化され観念化されたいわば古人のひとしくいなく美であり、古典に描きつくされた風雅である。

【著作】前述の他、連歌論書・学書の類に『宗祇初心抄』『連歌心付事』『淀の渡』『七人付句判』『浅茅』『宗祇初学抄』『連秘抄』『連歌嫌様事』『会席二十五禁』など、また伝宗祇の学書として『連歌諸体秘伝抄』『宗祇袖下』がある。句集には『自然齋発句』がある。独吟および一座した連歌には『三馬千句』『宗祇独吟何人百韻』『宗祇置字百韻』『能野千句』『河越千句』『北畠家連歌合』『美濃千句』『表佐(表)千句』『大原三吟』『菓守千句』『能勢頼則千句三物』『水無瀬三吟何人百韻』『湯山三吟』『清水(控)本式連歌百韻』『伊香

保三吟百韻』『畠山左金吾四季題万句三物』『名所百韻』など。和歌は『宗祇法師家集』が群書類従・和歌、私家集大成・中世IVに収められてゐる他、『歌五十首和歌』が存する。古典の注釈書には『伊勢物語山口日記』『源氏物語系図』『源氏物語不審抄出』『万葉集抄』『自讃歌注』などがある。【国】四二一五二

【伊地知鐵男】

【参考文献】荒木良雄『宗祇昭和16年』。○伊地知鐵男『宗祇昭和18年』。○同『連歌の世界』昭和42年。○井本農一『宗祇論』昭和19年。○江藤保定『宗祇の研究』昭和42年。○金子金治郎『宗祇の生活と作品』昭和58年。

宗祇終焉記

一冊。紀行。宗長著。文亀二年(二)三三三。奥書に水本与五郎上洛の時、京都にて宗祇知音の人々に披見のために記したとあり、『再昌草』文亀二年十一月五日の条に、与五郎が宗祇終焉のさまを語つたことが玄清から三条西実隆に伝えられている。【内容】文亀元年九月、宗長が駿河より宗祇の滞在する越後の国府におもむき、翌二年正月宗祇・宗頌と同道して上野草津に行き、宗祇はいったんわかれて伊香保に保養、再び同道で河越・江戸・鎌倉・国府津をへて七月三十日箱根の麓湯本に至り、明日は箱根越えという直前に、宗祇の病勢が悪化、終焉。死骸を輿に乗せて足柄を越え桃園の定輪寺に葬つて後、宗頌・水本与五郎らと駿河に至り、宗長の草庵に着く。そのあと今川氏親ら諸家の追悼のことを記し、兼載の長歌・反歌で終る。

【諸本】群書類従・詞林意行集(元禄三年(一六六)刊)・文の栞(安永七年(一七七八)刊)所収。写本は太田武夫蔵文禄三年(一六五)写本をはじめ内閣文庫本・島原松平文庫本等数

多く伝わる。【翻刻】群書類従・雑。『宗祇旅の記私注(金子金治郎、昭和45年)』。【島津忠夫】

宗祇置字百韻

一卷。連歌。宗祇作。成立年未詳。【内容】全百韻の句ごとに置字、すなわち漢字二字から成る熟字を詠みこんだ俳諧の連歌。発句「花にほふ梅は無双の梢かな」、脇「柳の眉目はげに今の時」という挨拶にはじまる本百韻、おそらくは、柳本坊を訪れた宗祇の即興であつたかと思われる。【伝本】原本は、近世初期、寛文(二)六二(一六五)の頃まで、京都六角堂頂法寺勝仙院の什物であつた。現在は、靈元天皇自筆の写本(兼載独吟百韻と合一冊)が、東山御文庫に残るのみ。六角堂は宗祇晩年の師、柳本坊専順が執行をつとめていた寺である。【翻刻】『書陵部紀要』3(昭和28年3月)。「宗祇の研究」江藤保定、昭和42年。【佐竹昭広】

宗祇初学抄

一冊。連歌。宗祇の学書。「初学抄」「初学用捨抄」とも。成立年未詳。【内容】発句に詠むべき四季の詞を月別に挙げ、月毎に移り変わる四季の状況や情趣を「古今」「新古今」から証歌を引いて解説。ついで初学の時の発句の詠みようは、細工がましき技巧を慎み、大様、正直を第一に案ずべきを説き、更に初心の時の心得、故実作法、稽古の段階的習得など十項目を添える。【諸本】国会図書館連歌合集本・天理図書館縮屋文庫本・太田武夫本他の写本がある。なお、続群書類従本「白髮集(白髪)」の前半に収む。【複製】連歌貴重文献集成6(太田本)。【翻刻】中世の文学「連歌論集(一)」。【伊地知鐵男】

宗祇諸国物語

五卷五冊。浮世草子。西村市郎右衛門(未達)作(序には「洛下旅館」と記す)。貞享二年(一六八五)刊。怪異小説集。【内容】全三十六話。連歌師宗祇が諸国を遍歴して見聞したとする咄の集。序文に「唯旅途の辛気はらし休奇の雑談に、聞く事見る事を歌となく詞となく懐筆に書集て一束にみつ。爰に予七祖由緒あつて此一帖を伝ふ」とあり、宗祇の旅程をもととした旨をこわわつてゐる。また作者は序文に宗祇の生国・姓名・生没時を記し、本文においても「南紀は本国なれば(巻二の三)」「高野に登る五障の雲(一)」「我は南紀の陽国なれば(巻五の五)」「化女苦し隴夜の雪(一)のごとく主人公を宗祇に似せるべく努力してゐる。これらは『撰集抄』より学んだ方法と考えられる。作品内容は、(1)和歌・連歌・狂歌に関する章(巻三の二)「盗賊歌に和ぐ」のような歌徳説話等十話、(2)僧宗祇ないしは仏教説話的な怪異譚、巻一の四「隠逸の扉(等)の十二話」、(3)主人公宗祇が傍觀者的見聞者となつてゐる章(巻二の二)「美童の節義」巻二の七「魔境の兵術(等)」の三つに大別できる。【素材・特色】本書の典拠には『撰集抄』巻二の四「隠逸の扉」に引用)、『奇異雑談集』上巻の二十一(巻四の三「遁不終鰐口」の典拠)、『醒睡笑』巻三「文字知り顔(巻四の五)連歌不知国」の典拠等がある。巻五の六「貧福有定」、同七「變方化」、同八「飛行在人鳥羽海の三章は『西鶴諸国ばなし』(貞享二年正月刊)巻五の七、巻三の六、巻二の二に拠つてゐるし、加えて貞享二年版「広益書籍目録」には、本書が「四冊」として登録されてゐることから、右巻五は「諸国ばなし」刊行後に四巻四冊の予定を変更して急遽加えられた巻であ